

# アフリカの手話に出会うまで

亀井伸孝

かめい のぶたか / AA 研非常勤研究員

インタビューは8月1日の昼休みに、AA研の5階のラウンジで、星編集長同席のもと西井が主な聞き役として行いました。亀井さんはこれから1ヶ月にわたる2008年度AA研言語研修「フランス語圏アフリカ手話」の開始直前のお忙しい時期でしたが、おだやかな物腰で手話に関する初歩的な質問にも根気強く答えてくださいました。その数日後には、同じ場所でフランス語圏アフリカ手話の講師の方と、手話で研修の打ち合わせをする亀井さんを見かけました。目に饒舌にやり取りするお二人の姿が印象的でした。(西井涼子記)

## 〈ニホンザルの観察から始まる〉

【西井】 まずフィールドワーク歴のお話からお聞きしたいと思います。亀井さんは、もともとは霊長類学・生態人類学を専攻されていて、ニホンザルの研究から始めたと聞いたのですが、ニホンザルの研究からピグミー系狩猟採集民の子どもの調査を経て、アフリカのろう者に取り組むようになったという研究歴について、どのような経緯でそういう研究に入り、移り変わっていったのかということをお伺いできればと思います。

【亀井】 どのあたりから話すのがいいのかわかりませんが、実は大学の理学部に入ったときは数学を専攻しようと思っていました。今振り返れば、こんなところまで来てしまったなという感じです(笑)。高校から大学の1、2年ぐらまでは、すごく数学が好きでした。ただ、たとえば統計を処理したりプログラムを組んだりというような実用的な分野よりも、数学基礎論などの哲学と重なるような分野のほうが好みでした。やがて数学そのものもいけれども、そういったことをしたり考えたりする「ヒト」という動物そのもののおもしろい、みたいに関心の焦点がずれていきます。

【西井】 人間は何でこんなおもしろいことを考えるんだろうと思って、結局その人間のほうに興味が向いていったわけですね。

【亀井】 そうです。進化の中でできた動物の一種なのに、何かちょっと変なことをしています。ことばを交わしたり、何か理屈をこねたり、かと思うと、ぜんぜん理屈に合わないことをしたりする。数学は秩序のある美しい世界で、それはそれでおもしろいんですが、そんなことを妄想したり考えたりするヒトという動物というのも変わってておもしろいといった興味です。理学部で、数学、物理学、生物学などの専攻を選ぶ前のころにそういうことを考え始め、人類学の授業や実習を取るようになりました。その関連で学部生のときにニホンザルの観察を始めまして、人類学の大学院に入ってからもしばらくニホンザルを続けてみようと考えました。

【西井】 修士のときですね。

【亀井】 そうです。修士課程の2年間は、宮崎県の幸島というところで調査をしました。

【西井】 芋洗いで有名な。

【亀井】 そうですね。ニホンザルが芋を洗い始めたことで有名なところなんです。幸島には京都大学霊長類研究所の観察施設があって、そこでお世話になりました。サルだけが暮らす無人島に住み込んだので、サル100対ヒト1みたいな感じです(笑)。2年間といってもずっと滞在していたわけではなく、1ヶ月行っっては戻り、また2ヶ月行っっては戻りというふうに、大学と宮崎県を往



ガーナ東部州にある、ろう者が多く暮らす村を訪れる。聞こえる村人も手話

復しながらの生活でした。

【西井】 そのときには、サルの個体識別もしていたのですか。

【亀井】 しました。100頭全員覚ええましたよ。

【西井】 誰がどういう性格で、とか。

【亀井】 ええ、性格も覚えますね。

【西井】 その後、博士課程に進んでから、カメルーンに行かれたんですよね。カメルーンでは、サルの調査はされなかったのですか。

【亀井】 サルの調査はしていません。修士課程を修了した時点で、これからの研究はどうするのかということや、やはり私はサルそのものよりも、最終的にはヒトがどういう動物なのかを知りたいという興味があるのだと思うにいたりしました。サルにはずいぶんとお世話になっておきながら、失礼かなとも思うんですけども(笑)。ニホンザルを観察していると、ニホンザルという種についてはよく分かるし、そこからいろいろヒントも得られますが、直接人間のことを知りたいという私の関心を満たす方法としては遠回りになると思ったのです。もちろん、サルを含めた広い視野をもって、進化のプロセスなども含めて人間を理解するというのが霊長類学の目的で、その意義は大きいと思います。ただ、私はもう少し手っ取り早く、ダイレクトに人間を理解したいと思うようになっていました。

## 〈アフリカの狩猟採集民と出会う〉

【西井】 アフリカへ行かれたきっかけは何だったのですか。



で話していた (2006年)。

**【亀井】** 修士課程が終わり博士課程に進んだころ、人の研究をするためのテーマ探しをしていました。たまたまあるアフリカの調査をしている科研費(科学研究費補助金)のチームの会議におじゃまして、飲み会に流れたとき、先輩のアフリカ研究者たちに「どうする、行くか行かないか」と聞かれたので「ぜひ行きたいです」と答えまして。それがすべての始まりです(笑)。アフリカについて文献研究を重ねて、このテーマで調査に行きたいというような確たる準備もなかったのですが、本当に幸いなことに科研費のチームに入れていただきました。おもに中部アフリカのカメルーンで熱帯雨林の狩猟採集民を調査するチームなので、私も参加していきなり、じゃあ1年行ってこいと投入され、しかも、それでは足りないからもうちょっとおりますと申し出てさらに5ヶ月延長して、結局1年5ヶ月カメルーンにいたんです。

**【西井】** そのときは、生態学的な調査ですか。

**【亀井】** ええ、森の中で暮らす人びとが日々何を食べているかを調べたりとか、そういうことから始めていました。ただし、環境や動植物の調査から、次第に人びとがすることなすこと、たとえば交わされているコミュニケーションやことば、行動、社会関係などの調査が中心になっていきました。私は森の中で子どもたちの日常生活の調査をしました。日々どこでどんなことをして、どういう顔ぶれと役割で狩猟や採集をし、いつどのようにそれを覚えていったか、といった行動やコミュニケーションを重点的に見ていました。方法としては、対象集団に参加して直接観察したことを量的にとらえる手法を使うことが多かったです。



ガーナの首都アクラ市にある、全国ろう者協会の事務所を訪ねる。会長のアサレ氏と (2006年)。



ガーナの国立ろう学校を訪れ、生徒たちとおしゃべり。ろう児たちは、アメリカ手話から派生したガーナ手話で学ぶ (2006年)。

**【西井】** 数えるとか、測るとか。

**【亀井】** ええ、生態人類学のお家芸です。こまめに数えて、測って、数字で記録するみたいなやり方はそのまま踏襲しながら、子どもたちの集まりについて行って遊びの仲間に入れてもらい、日常のさまざまな活動の調査をしていました。

それと関連して、そういった森の中に住む狩猟採集民の子どもたちに対して、キリスト教ミッションが学校をつくったり先生を派遣したりして、学校教育を普及させようとしていました。子どもたちがなかなか学校に来ないので、学校にバナナをもってきてみたり(笑)。

**【西井】** 子どもたちを食べ物で釣る(笑)。

**【亀井】** そうすると、子どもたちはバナナはしっかり食べるんですけど、集落のおとなたちが狩猟のために森に入ると、子どもたちも学校を休んでついていってしまいます(笑)。うまくいっているようで、なかなかうまくいっていません。そういう場面をあわせて見たりする中で、森の中の文化というのがそれはそれで完結しておもしろい世界をつくっているのと同時に、マジョリティや国家、制度がいやおうなしに関わってきていることも分かります。ただ、それに圧倒されてしまっているわけでもなく、一部は受け入れたり、一部はくぐり抜けたり無視したり、そういったマイノリティの人たちの柔軟なやり過ごし方というのがとても魅力的でした。

後に手話に関する調査に関わっていきますが、マイノリティによるマジョリティとの距離の取り方や戦略という研究テーマは似かよっています。狩猟採集民の人たちと長く付き合った経験が、きっと私の興味の底にあるのでしょう。そういうことは、後から振り返ると分かることなのですが。

## 〈アフリカの手話の世界へ〉

【西井】手話は、いつごろからされていたのですか。

【亀井】博士課程に入ったときにサルからヒトへと研究テーマを大きく変えましたが、ちょうど同じころです。修士課程修了の発表が終わってぼかっと暇になったときに、偶然がいくつか重なって、京都で日本手話の勉強を始めたんです。だからその年というのは、アフリカには行かぬ、日本手話と出会

うわで、考えてみればたいへんな年でした。

【西井】ここで大きな転換があった。

【亀井】ぼかっと暇になったのがいけなかったのかもしれませんが（笑）。

【西井】それで今にいたるんですね。

【亀井】はい、かねてからの漠然とした人間に対する問題意識が、具体的なテーマに結びついたという感じです。ちょっと新しいことをやってみようかなというときに、近所で『音のない世界で』というフランスのろう者のドキュメンタリー映画の上映がありました。知人が「無料のチケットが1枚余っているから、行くか？」と言うので、「ただなら行こうかな」ともらって行きました。ろう者たちの独自の言語と文化の世界があるということを伝える、メッセージ性のある映画でした。

ろう者たちが、私たち耳の聞こえる人たちのおよび知らないところで自分たちの言語の世界をつくっていて、逆に聞こえる人たちの身勝手なふるまいを冷やかな目で見ていることもあるなど、これまでまったく知らなかった世界に出会ったような気がしました。それなら、ちょうど暇もできたことだし手話に触れてみようかなと思い立ち、日本手話の勉強をしました。ただ、じきにカメルーンに調査に行く話が決まりましたので、日本手話の勉強は中断してアフリカに渡ります。

【西井】アフリカでの手話との出会いは。

【亀井】アフリカに行ったら行ったで、向こうにもきつとろう者の手話や文化があるだろうと期待していたので、チャンスがあれば出たいなと思っていました。すると案の定、ろう学校やろう者の団体、ろう者が手話で営むキリスト教会があり、そこで話されている手話の世界をかいま見ることができました。やはり世界中どこに行ってもろう者は手話を話しているのだという思いと、手話や語られている歴史、世界観などがまったく違うのだという差異への驚きと、両方を同時に感じました。

【西井】違っていて驚いたことと言うと？

【亀井】とくにびっくりしたのは、外来手話言語の問題です。日本でしたら、日本手話という歴史的に日本国内で成立した手話が話されているのですが、カメルーンの場合は1970年代ぐらいにアメリカ手話もたらされ、90年代になって新しくフランス手話を教える学校が現れ、というふうに、よそから手話もたらされて教えられることが当たり前になっていたことです。

外来手話言語については、地域のろう者たちが歓迎していないこともあったり、また時には、すっかり定着してしまってもはや外来手話とすら思われていないケースもあつたりしますので、一概にはよしあしを論じられません。ただ、「日本はアメリカ手話？ それとも、どこの手話を導入して教えるの？」みたいなことを尋ねられたりしますと、本当に世界観が違うなという印象を受けました。

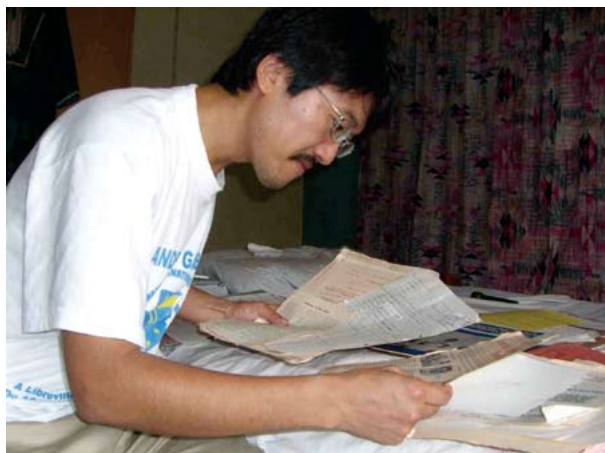
日本にいてろう者の文化を学ぶというと、聞こえる世界と聞こえない世界の二項対立、あるいは日本語と日本手話の二項対立という図式でとらえられがちです。その文脈で「異文化理解」というと、「音声日本語の世界から日本手話の世界に入る」ということを意味することになります。しかし、アフリカ諸国では、音声も多くの言語が併用されていますし、さらに手話にもいくつもの手話言語があつて、外来手話もたらされたり、あるいは一部は変容して定着していたりするので。

【西井】手話の多言語状況ですね。

【亀井】ええ、いちど手話の世界に入った後も、何回か別の手話言語集団に入っていく必要があるみたいな状況です。また、そういうことがごく自然に受け止められているという世界観にも驚きました。かといって、外来手話は出て行けというふうに、アフリカのろう者たちが外来手話排斥運動に燃えているかという、案外そうでもなくて、一部は許容していたり一部は苦々しくとらえていたり、価値観のいろいろな温度差も見られます。これは、日本で日本手話の世界に入ることで異文化理解ができそうだと考えるのとは違った、いくつかの高いハードルがありそうな感じがしたので、それならき



ナイジェリアのイバダン市で、公立ろう学校を見学（2006年）。



ナイジェリアのろう者キリスト教センターに保管されている、ろう者の歴史に関する膨大な文献を調査する（2006年）。



ナイジェリア最大の都市ラゴス市のろう者の教会を訪問、プレゼントをいただく（2006年）。



ナイジェリアのろう者キリスト教センターで、日曜日にろう者対象の講演会を開いた。ナイジェリア手話で講演する（2006年）。



ナイジェリア、ラゴス市のろう者の教会の日曜日の風景。この日は、150人ほどのクリスチャンのろう者たちが集まった（2006年）。

ちんと関わって理解してみたいと考えたわけです。

**【西井】** そして、アフリカの手話の研究に入ることになった。

**【亀井】** アフリカの手話のことは、世界的にもほとんど紹介されていません。せっかく自分が現地で教わったことが、世の中で存在しないことになっているという状況については、ちょっとした義憤のようなものも感じました。手話の研究というと、どうしても欧米の手話に関するものが中心をしめています。また、日本やアメリカなどでは「音声言語ひとつ+手話言語ひとつ」という異文化理解のモデルが、どうしても主流になりがちです。いやいや、手話の世界にもいろいろあって、しかも音声の多言語と手話の多言語が共存している社会もあるんです、というようなことをきちんと紹介したいというのが、深入りし始めた理由です。

**【西井】** その研究が、今年 AA 研で開講される言語研修「フランス語圏アフリカ手話」につながっていくんですね。

**【亀井】** ええ、日本の語学教育の中でアフリカの手話を紹介できるというのは、たいへんいいチャンスだと思っています。ちなみに、言語研修のために来日したカメルーンのろう者の手話講師も、1998年ころに現地で出会って以来、ずっと付き合いが続いている友人です。

### 〈ろう者の文化を学ぶ〉

**【西井】** 手話が多言語状況だとすると、亀井さんは手話を何言語も話せてすごいですよね。手話を覚えるのは大変ではありませんか。

**【亀井】** 手話を覚えるのは、やはり大変です。とくに、ひとつ目の手話が大変でした。耳の聞こえる人がろう者の世界に入るといえるのは、手話の語学力を身につけるだけではなく、みだりに相手に声で話しかけないとか、視線の適切な使い方を覚えるとか、いろいろな行動上のマナーをあわせて覚えなといけないからです。それから、聞こえる自分はだんだんと手話を覚えていけるけれども、聞こえないろう者は音声言語を覚えることがたいへん難しいというような、完全に対称形をした異文化関係ではないという事情についても理解しておく必要があります。そのあたりで、最初の手話言語のハードルはとても高かった覚えがあります。

**【西井】** ひとつ目を覚えたら、その後はどんどんいろいろな手話を覚えられるものですか。

**【亀井】** そうですね、最初に日本手話に入ったときの敷居の高さから比べると、2つ目の手話言語を覚えるのは、まあ通常の語学のようなものかなと感じます。ろう者の文化は地域によって違いますけれども、「音を使わない生活習慣をもっている」ということは必ず共通していますから。ろう者と接するマナーなどは一度覚えたら、よその手話言語集団でもあるていど応用できるように思います。

**【西井】** 「手話」といっても、使うのは手だけではないんですよね。体の使い方や、表情での表現もいろいろありますよね。

**【亀井】** 手だけではないですね。上半身全体です。ですから、ろう者はおもに相手の顔を見ていて、手の動きをいちいち目で追ってはいません。

**【西井】** たとえば疑問文か肯定文かといった区別も、実は表情で行っているんですね。アイコンタクトして、会話するんだそうですが。

**【亀井】** ええ、相手と視線が合ったときに会話のスイッチが入り、最後は視線がそられて会話が終わるとか、会話の最中に視線をそらしたら失礼になるとか、いろいろルールがあります。そのあたりは、日本手話で一度覚えたら、ほかの手話言語でも応用が利くんですね。手話言語の語彙や文法は地域によってまったく異なりますが、人の体が生み出す言語って案外似ているところもあるのかなと思うことがあります。

このあたりの直感は、もともと人類学を目指し始めたころの、「人間ってどういう生物なんだろう」という関心にもつながるように思います。これまでずいぶん多くの音声言語と手話言語に出会ってきましたが、音声にせよ手話にせよ、ヒトはとにかくコミュニケーションを楽しむ動物なんだという全体的な見方が、私の底を流れています。

**【西井】** ほんとうに、ろう者の手話は音声言語と同じようにものすごく雄弁で、楽しそうに見えますね。どうもありがとうございました。